

青年よ処女よーある青年の様を見て

青年重ねて来らず

青年よ。処女よ。何が故になまけているのか。

青年期にして青年期の尊きに目覚めず、その宝玉の如く尊重されていい毎日を徒らに暮しているのを見ねばならぬほど、辛いことがあり得ようか。

おん身が力としている父母もやがて世を去るであろう。

兄弟の脛すねをかじつてもいられない時が来るであろう。

処女はやがて他人の家に妻として入らねばならぬ日が来るに。

嫌が応でも自身一人起たねばならぬ日、何が一体、君を助けると思うのであるか。

凡そ世の中に立つて、一頭地をぬいて世の尊敬を受けているほどの人で、その十代二十歳代に、夜を昼について刻苦勉励しなかつた人がいるであろうか。真剣に真面目に生きなかつた人がいるであろうか。

しかるに何故ぞ。その若きで、内には、こまじやくれた不平不満に世をすねたり、安価な享樂や虚榮に、何等の方針も立てず、発奮もせず、努力精進もなく、貴き毎日を徒食しているのであるか。

来る日、必ず、臍ほそを嘔ほんで泣くも詮なき時が来るであろう。

青年重ねて来らず……どうかこの語の前に、ほんとうに襟を正して立つてくれ。

内に充宝せよ

嬰兒みどりごに玄人はいない。しかし老人になつても素人ではいけない。必ず何かの達人とならなければならぬ。

年三十歳になつても、親に対する道が解決されず。

結婚して二十年経つても、夫婦の間が解決されていない。

十年手紙を書いても、少しも文字にも文章にも進歩がない。

平気で、無意味に、嗜むことなく、学ぶことなく、精進することなく、流れて行つた歲月は、白紙の巻物である。

世間のこと実にかくの如し。ましてや、何らの精進なくしてどうして、古今の聖賢の開拓された尊い世界、生命の道、宗教の世界、永遠にわたる大道に足を踏み入れることが出来ようぞ

「青年の時、そんな堅苦しいことがいけるか。……若い時は二度とはない。今遊んでおかねば。」

そうした不真面目な考え方で、エロ、グロ、ナンセンスなことばかり考えたりしている間に、時は遠慮なく流れてゆくではないか。それでは自分自身を、泥みぞの中に棄てるという言葉である。泥沼の中に命からがらあえいでいる生きた標本がそこらに満ちているではないか。

今の内に必ず汝自身を培つて汝自身を充実せしめよ。

因果

君がもし、因果の法則が厳然として天地の間に流れていることを信ずるならば、どうか今日、遊んでいないで精進してくれ。腐れた世界から足を洗ってくれ。今日一日の精進は、必ず君の内に蓄蔵されて、いつかは必ずものを言う。一日に一千字記憶することはできない。しかし一日々々続けられた精進は、必ず汝自身の徳となつて光つて来る。

人生では、汝の精進を通さずしては、何ものも汝のものとはならない。

かの一文不知の老人にして、念仏の光、村に輝き、谷に香りて、世の灯明台となれる人が、如来本願の他力を感謝して喜んでゐる、しかしその過古には、血のにじむ精進求道の歴史があり、不断に相続した念仏の行歩がある。

因果を信じ、因果に随う者のみ、因果に生かされて因果を超える。

心配せずに

弱き者は、必ず将来に対する不安を持ち、心配を持つ。

だが自信を持つてこの種の人に告げる。

たとえ病弱であつても心配するな。たとえ体が不具であつても心配するな。学校の成績が悪くても心配するな。親類がなくても心配するな。財産がなくても心配するな。その他いかなる条件があつても心配するな。

ただ私の言うことを信じてこれだけのことを実行してくれ。まず親に孝行せよ。必ず親の喜ぶ子供になれ。親を大切にせよ。親を敬愛せよ。親に感謝せよ。親を困らすな。悲ませな。心配さすな。そうしたことを得る溝があるなら、必ずこの溝を打ち砕いて、親と一つ心になつてくれ。これ明るい生涯に出発する必須の条件である。

念願

「念願は人格を決定す。

継続は力なり。」

私は今日までこの言葉を言い続けて来た。念仏の人も、この言葉をもつともつと噛みしめてくれ。念仏なき人よ、はつきり受け取ってくれ。

今日も毎日、人間の享樂に走りつづけ、親ももて余し、社会も困るような人物のまゝでは、世間の業はもちろん、尊い仏道等のこの人のものにならうはずがない。

人生は極めて厳肅なものであり、真剣に生きねばならぬものであり、己を真に愛する者のみ、よく古今の聖者の歩みたもうた道へも入り得るのである。

「念願」の低いもの、何等の念願を持たぬ者、その若人の群が一体どこへゆくのか。念願の前にのみ、それに相応する門が開ける。

尊き念願によつて生きてる一日は、何等の念願なき五十年に勝る。

されば念願よ、尊き念願よ。青年処女の魂を奪い取れ。

墮落した者も

世には不幸にして、青年血氣のままに走り、本能のままに墮落して、泥沼の中に沈んでゐる青年男女がある。もしあなたの周囲に、かゝる青年男女がいるならば、決してこれを嘲笑することなく、軽蔑することなく、裁くことなく、光の世界に、教えの園につれだしてくれ。

もし一度不幸にして暗の中に落つるとも、決してそのまま自暴自棄に陥つたり、ますます泥濘でいねいの中へ入つたりしないで、必ずそこから先の世界へ歸つて来い。青年の時、一度墮落の淵に沈みつゝ、後、立派に大成した人は多いことである。必ず悲観することなかれ。自覚し救われて光の中に感謝の生活に入れ。

やけをおこすな

青年よ、自暴自棄になるな。どんな低い仕事でも本気でせよ。初めから高い仕事や地位を望むな。直宮様でも兵卒から上られるではないか。

青年よ、人が腕を認めてくれず、損な役割ばかり果すようでも、やけになるな。何よりも、その間に自己を成長せしめよ。充実せしめよ。一年や二年で人が見てくれぬとて愚痴を言うような自信のない生活はするな。延んだ杉は必ず現われる。早く知られようと浮身をやつしたり、小細工をするが如きは芯のとまつた証拠である。

青年よ、如何にその身が重い荷物の下敷だとして悲観するな。苦難の中にも必ず生きる道が開ける。よくそれに堪え、教えを生かし、道を発見せよ。君のうちに体験し、充実したもののだけが、君の為の無形の身代となる。

かく言う私がこの分でならば、何もかも知つて来た。あらゆる重荷に堪えて来た。3立身出世が無かつた代りに念仏がある。我はしよせん重い荷物を負うた人の友である。

上に延ばれねば、横に太れ、高く育たれねば、底に根を張れ。人生は誰にでも平等である。

青年よ。処女よ。悲観せず、やけをおこさず、努めてくれ。

光

青年よ。処女よ。求道せよ。聞法せよ。無限の宝庫たる仏法の門に入れ。大無量寿経、真実の教えを聞いて大信心を決定し、念仏の灯を汝のうちに点ともせよ。信心は汝自身の自燈明である。

正信念仏は常住不滅の灯である。

されば念仏行者は、家庭の光であり、社会の灯であり、国の光である。

家庭の光となり、社会の光となつた時、汝は初めて生きることの喜びを許されるであらう。鬼の如き人、世の悩みの中心となる人に、歡喜の許された例はない。

されば青年よ。ついに念仏行者となれ。